094 『学員名簿』について

一九八五（昭和六十）年十月、創立百周年記念事業の一環として刊行された『学員名簿』（昭和六十年版）は、一八八六（明治十九）年に英吉利法律学校を卒業した四人に始まり、その後一世紀の間に学窓を巣立っていった三四万人余の学員を収録している。

『学員名簿』は、戦前から学員会が発行していたが、戦争の激化による紙不足のために、一九四三年九月の「追録」の刊行を最後に、五一年までとだえた。戦後は学員数の増加という事情ともあいまって、五二年に復刊され、その後五六年、六三年、七一年、八五年と間隔を広げ刊行されてきた。

『学員名簿』は学員相互の絆を表すものであるが、五二年の復刊『学員名簿』の編者が「終戦後の人心ようやく虚脱状態より目醒め、同窓の消息を尋ねること頻りとなり」と述べているように、戦後の復刊には、戦争によって離散した同窓を結ぶ絆の復活という意味もあった。

また『学員名簿』は、歴史史料でもある。現在、所在を確認することのできる古い『学員名簿』は、一八九四年四月の「東京法学院院友会会員名簿」で、九六年六月の名簿がこれに次ぐ。前者には、姓名・現住所・職業が、後者には、それに加えて入会資格（卒業・講師・推薦の別）等が記されており、当時の卒業生の動静を知ることができる。

九六年の名簿を見ると、収録された一、七五〇人の内訳は、八六年から九五年まで一〇年間の卒業生一、五七八人、講師一〇〇人、推薦七二人で、うち五三人が物故者である。出身地別では、東京が一二七人で断然トップ。以下、長野、千葉、新潟、埼玉、茨城の各県と続くが、現在、東京に次いで在学生が多い神奈川県が当時は関東地方で最も少ない二九人という点は興味深い。

また、就職先の内訳は、弁護士一八五人、判検事など

学員名簿（1902年、1952年）

法官一八二人、官公吏一二〇人、新聞記者一〇人、実業界五二人、議員九人などである。卒業生の法曹界への進出は創立一〇年余にして早くも顕著であり、さらに、この時の職業不明者について、一九〇二年七月の『東京法学院院友会会員名簿』をもとに追跡してみると、弁護士一七人、判検事二八人を加えることができる。

『学員名簿』は、中央大学で学んだ学員一人一人の生きた証であるといえよう。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。